

追悼

武田正先生

長野 晃子

武田正先生は、肩書きを見れば、山形県公立高等学校教諭、筑波大学教授、筑波停年退職後さらに乞われて山形女子短期大学教授、東北文教大学短期大学教授を歴任された文学博士、業績面では、『佐藤家の昔話』（桜楓社）『雪国の語り部』（法政大学出版局）『飯豊山麓の昔話』（三弥井書店）『木小屋話』（桜楓社）、『昔話世界の成立』（三弥井書店）『日本昔話の伝承構造』（名著出版）等々枚挙にいとまがなく、まさに立志伝中の人物。

しかしお人柄はというと、謙虚・控えめ・物静か、なかなかのイケメン長身ながら気取ったところが一切なく、学会・研究会等の休憩時間には煙草を手に皆の意見に静かに耳を傾け、自己アピールはまずなさらない、偉ぶらない尖がらない方なので、誰も構えさせることなく、やさしく親しみやすい方だった。

まだ駆け出しの頃の武田先生について関敬吾先生が次のように高く評価されている。「武田正君はわたしの昔話研究の若い同志者の一人である。同君はその郷土にいく世紀かにわたって語り伝えられて来た昔話を、その語り手たちからじかに聞き、たゆみなく克明に記録している。わたしなど、限りなくその恩恵をうけている……。昔話は語る文芸で、したがって必ず聞き手が必要と

する。かくして昔話は語り手と聞き手のあいだで保存されて来た……。武田君はその昔話を記録し、生きた姿で研究しようとしている……。武田君は……すぐれた伝承者にめぐり会っている。こうした伝承者たちに巡り会い、それぞれの記憶を引出すことの出来たのは武田君の人柄に負うところが多い。わたしは武田君を『木小屋話』を媒介として知った……。若者の寝小屋、娘たちの夜業宿での語りのなかには、童話と機能をことにする話の存在には注意されていたが具体的には知ることは出来なかった。武田君がこれをはじめて吾々に知らせてくれた。武田君はこれまでの昔話採集経験にもとづいて、将来の研究の布石を一つ一つ敷いているかの如くである。山形の昔話を観察し研究している第一人者である」（『昔話世界の成立』序）。異を挟む人はいないであろう。話を語り手からじかに聞き克明に記録の件だが、後に有名出版社から上梓された書物であっても、当初は武田先生ご自身執筆で原紙を切り、謄写版で印刷し刊行されたものだった。

武田先生のご業績は何といっても「木小屋話」をはじめとする民話の偉大な蒐集にあるとはいえ、そのかたわら、国内外の文献にも広く深く学ばれ、研究過程も逐一、あたかも日々日記を記すがごとくに、あくまでも謙虚に、小声でささやくがごとくに記録し、冊子化し、発信してくださった。

武田先生の研究は驚くほど視野の広いものだったが、核心は常に、関先生の指摘どおり、生きている昔話（民話）だった。長年、話者からたくさん話を聞いた実体験から、昔話の語りとは、話者の一人芸ではなく、話型も紋切り型では決してなく、

語りのつど語り手と聞き手と語りの場で構成されるもの（創り出されるもの）であると確信し、随所で、従来の昔話研究が聞き手を疎外してきたこと、語りの場の重要性を等閑に付してきたことに、研究者たちの注意を惹こうと努められている。従来の話型の確認・確定研究の必要性を認めつつも、話者は聞き手と語りの場の要請に応じて、語り加え語り変えなど話に様々な工夫をこらすことに注意を喚起されている。話者が話に工夫をこらすことを、武田先生に見出された五四九話の語り手佐藤孝一氏は、^{書く}作を入れると云っているという。作を入れるという語を民俗語彙に、民話研究語彙に加えたい思いにかられる。

多くの話者たちと長年じかに接してこられた武田先生から、あるときたいへん興味深いことを伺った。婆さまが夜語りをするとき、子どもたちを座らせて、子どもたち一人一人にミカンをあげる、そのあともう一つミカンを子どもたちのうしろの暗闇に置く、隅っこでじつと話を聞いている夜ブスマへあげるミカンだ、とのこと。語りの場には、語り手聞き手だけでなく、目には見えない何者かもあることを子どもたちに気づかせるミカン。夜ブスマを媒介として、語りの場は世界・宇宙をも包含することになる。民話研究の進展への貴重な指標となる夜ブスマへのミカンの提示、先生ありがとうございました。

民話の真髓を極めようと、生涯を民話に捧げられた修道者ののごとき方であった武田先生、ご冥福を心よりお祈りいたします。

（ながの・あきこ／東洋大学名誉教授）

追悼 V・M・ガツァーク博士を偲んで

齋藤 君子

ロシア科学アカデミー準会員であり、ロシア口承文芸学界を代表する学者のひとりとして長年にわたり活躍されたヴィクトル・M・ガツァーク博士が二〇一四年二月二〇日に亡くなられた。享年八〇歳だった。心からお悔やみの言葉を捧げる。先生は二〇〇六年に日本口承文芸学会の招きで来日され、当学会創設三〇周年を記念する国際会議「グローバリズムのなかの口承文芸」に出席され、「フォークロア遺産の継承とポストフォークロアの創造の諸形態」と題して講演された。

博士はモルドヴァ共和国の出身で、キシニョフ大学を卒業後、モスクワの世界文学研究所で学び、一九六〇年にモルドヴァとルーマニアの叙事詩の研究によって学位を取得している。その後、同研究所のフォークロア部門主任教授として指導に当たり、多くの研究者を育ててきた。わたしは世界文学研究所を訪ねた折に、若い研究者たちを熱心に指導されている氏の姿を何度か目している。先生が企画された国際フォーラムに出席した際には、翌日発表を控えている若手研究者たちを順次部屋に呼び、夜遅くまで助言されていた。